

令和元年度
中学生の主張東京都大会
発表文集





発表者のみなさん



努力賞受賞者のみなさん



開会挨拶



発表者紹介



発表の様子



審査の様子



結果発表の瞬間



受賞おめでとうございます

目次

1 開会あいさつ……………金子光博（東京都生活文化局都民生活部長）……………3

2 発表者及び各賞……………

知事賞

・心の扉……………筑波大学附属視覚特別支援学校（中学部）……………一年……………藤田大悟……………4

東京都教育委員会賞〔氏名五十音順〕

・尊い命は繋がっている……………立川市立立川第七中学校……………三年……………張替望恵……………5

・国際人とは……………台東区立忍岡中学校……………三年……………本間樹音……………6

優良賞〔氏名五十音順〕

・心のかべをとりはらおう……………東京都立大泉高等学校附属中学校……………三年……………倉島菜帆……………7

・スマホに使われない……………東京都立大泉高等学校附属中学校……………三年……………瀧澤結……………8

・安全な社会作りのために……………世田谷区立芦花中学校……………二年……………津留歩花……………9

・「黄色い四つ葉のクローバー」……………國學院大學久我山中学校……………三年……………不破萌瑛……………10

・本当の最後のスリッパ……………國學院大學久我山中学校……………三年……………前田華果……………11

・私達にできること……………稲城市立稲城第五中学校……………二年……………皆川桜……………12

・僕達はなぜ学校に行くのか……………葛飾区立立石中学校……………一年……………柳川天我……………13

努力賞 (氏名五十音順)

| | | | | | |
|---|----------------|--------------------|----|------|----|
| | ・小さな心配りから始めよう | 立川市立立川第三中学校 | 二年 | 浅井紗和 | 14 |
| | ・違いを認めるといふこと | 青山学院中等部 | 二年 | 荒木征爾 | 15 |
| | ・私の人生脚本 | 東京都立小石川中等教育学校 | 一年 | 片倉宏海 | 16 |
| | ・心の目で見よう | 立正大学付属立正中学校 | 一年 | 神本真宏 | 17 |
| | ・「聞くこと」の大切さ | 杉並区立井荻中学校 | 二年 | 小原英佳 | 18 |
| | ・知的障害についての理解を | 立川市立立川第四中学校 | 三年 | 西山智春 | 19 |
| | ・「災害から命を守るために」 | あきる野市立五日市中学校 | 二年 | 萩原 樹 | 20 |
| | ・介護 | 立川市立立川第四中学校 | 三年 | 平島弥奈 | 21 |
| | ・努力から学ぶこと | 葛飾区立葛美中学校 | 三年 | 山本結加 | 22 |
| | ・死について | 國學院大學久我山中学校 | 三年 | 山本陸斗 | 23 |
| 3 | 審査員長講評 | 尾木和英(東京女子体育大学名誉教授) | | | 24 |
| 4 | 大会の概要 | | | | 25 |
| 5 | 募集概要 | | | | 26 |
| 6 | 応募状況 | | | | 27 |
| 7 | 過去の入賞者(直近3年間) | | | | 28 |

開会あいさつ



東京都生活文化局都民生活部長

金子光博

本日は、「中学生の主張東京都大会」に御出席を賜りまして、誠にありがとうございます。本大会は、中学生の皆さんが日頃考えていることや将来への希望などを力強く発表することで、自ら成長する機会となればと考えて開催しております。また、広く都民の皆様にも、中学生が自身の生活の中で、どのようなことを感じているのかを知っていただき、理解を深めていただく機会になればと思っております。

今年度は五、七八四作品の応募がありました。本日はその中から、厳正なる審査を経て選ばれた十名の皆さんの力作をスピーチしていただきます。心のこもった発表となることを大いに期待しております。

さて、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催が、いよいよ来年に迫ってまいりました。この機会を通じて、自己実現に向けての努力や困難に立ち向かう意欲の大切さ、多様性を尊重することの大切さなどを実感していただきたいと思っております。また、オリンピック・パラリンピックは、文化の祭典でもあります。都は、現在、「Tokyo

Tokyo FESTIVAL」として、様々な文化プログラムを展開しており、中学生の皆さんにも御参加いただき、芸術文化への理解も深めて頂ければと存じます。

知事賞



心の扉

筑波大学附属視覚特別支援学校(中学部) 一年

藤田 大悟

「視覚障害はただ目が悪いだけで、努力すれば健常者と同じように勉強できる。」
普通小で日々を過ごす中、こんなことを思っていました。今思えばその気持ちの後ろには「みんなに遅れを取らないように頑張らなきゃ。」という一心で自分を追い詰め、クラスから自分を守ろうとする見えない鎧を身につけていたのだと思います。

六年生の春。鎌倉への遠足での出来事です。鎌倉は山道も多いことから当初は行くことに乗り気ではなかったのですが、思い出作りと思つて行くことにしました。

「班全員で最終チェックポイントを回り終わること。終わった班からお弁当。」というルールで遠足がスタート。全員がチェックポイントめがけ走り出し、班のみんなもどんどん進み、僕との距離は離れていきました。

「僕が視覚障害者ってこと、知ってるよね。少し待つてよ。」
と思いましたが、次第にみんなの姿も鎌倉の山道の中に消えていきました。やつと合流した最終チェックポイントで、

「お前のせいで回るのが遅くなったじゃないか。」
と言われ、愕然としました。

「ごめん。」
この言葉で精一杯でした。遠足終了。

僕は遠足の後、
「みんなの気持ちもわかるけど、あんなことを言われて解決しないまま卒業したくない。」
とじつくり解決の道を探っていました。ふと、

「僕の見え方、配慮して欲しいことを皆に説明したことあったかな？」
と考えた末に「自分」をスピーチで伝えることにしました。

十一月七日、ついにその日が来ました。まず器具を使って僕の見え方を体験してもらおうと、

「大悟ってこんなに見えてなかったんだ。」
という第一声が飛び交いました。見え方さえ分かり合えていないことを知り、

今まで説明していなかった自分が情けない反面、話せて良かった、という安心感が複雑に混じりました。次に配慮して欲しいことなどを伝えてスピーチが終了。

この日は僕にとって貴重な一日となりました。なぜなら、予想以上にわかり合えていなかったことを知り衝撃的だった一方で、現状を伝える大切さを痛感したからです。

そして、スピーチから一ヶ月経った十二月八日、音楽会を迎えました。僕は学年代表としてピアノ伴奏をすることとなり、日々練習に励みました。僕は本番当日、保護者を前に異様な緊張に包まれた体育館で演奏が始まりました。

不覚にも数小節の音が抜けてしまいました。が、日々練習を重ねたことで幸運にも伴奏を再開できました。しかし伴奏終了後は、あれだけ練習したのにといい、やりきれない思い、合唱を台無しにしたという罪悪感、鎌倉の時のように皆から責められ孤独を味わうのではないかとという恐怖、様々な思いが一気に押し寄せます。今までにないほどの涙が溢れました。

恐る恐る教室へ帰るとなんと予想に反してみんなが励ましの声をかけてくれたのです。この時僕は辞書を引いても適する言葉が見つからないほど幸せな気持ちでした。スピーチで皆が本当の僕をわかってくれ、一人のクラスメイトとして受け入れてくれた、と肌で感じられたからです。同時に、皆に対して構えていた僕の中にあった見えない壁も崩れていきました。この瞬間、気持ちが初めて通じ合い、障害という枠を超え認め合っている仲間の証拠を感じられました。

この体験で新たなことに気づきました。

それは、「自分が障害者だから自分を理解してもらおう」と相手にばかり求めるのではなく、自分も心を開いて相手を受け入れる必要があるということです。このことは当然のことのようですが、その一歩を踏み出すのはとても勇気のいることでした。だからこそこのような体験ができてとても嬉しいのです。この体験を心のノートに太文字で書き記しておきたい。

「心の扉を開こう。そして、I can チャレンジ。」

東京都教育委員会賞



尊い命は繋がっている

立川市立立川第七中学校 三年

張替望恵

たくさんの命がこの一つの空の下で繋がっています。私たち一人一人の思いや行動が繋がって、海の向こうや遠い国の誰かを笑顔にすることもできます。私は中学生になってそれを強く感じる体験をしました。

私の通う中学校では、毎年ユニセフ募金活動をしています。私は昨年、部活動の仲間とこの活動に参加しました。最初は緊張していましたが、先生方もそばで見守って下さっていたので思いきって大きな声で呼びかけることができました。抱えていた募金箱に初めて募金をしてもらった時には、人の温かさを感じ、とても嬉しかったです。

募金活動に参加させていただいて、たくさんの人の優しい気持ちを直接受け取ることができ、貴重な経験になりました。募金して下さった方々の優しさや命を思いやる気持ちが、世界中の支援が必要な子どもたちに届くといいなと思います。

私は、他にも自分にできることがあるのではないかと考えていました。そしてこの春、一冊の本を読み、ランドセルギフトという取り組みを知りました。そこには、キラキラとした笑顔でランドセルを抱きしめている女の子の写真があり、心がひきつけられました。

ランドセルギフトとは、私たちが六年間使ったランドセルを日本からアフガニスタンへ贈る活動です。アフガニスタンは全ての子どもたちが学校に行ける環境ではありません。家族を助けて働いている子どもたちもたくさんいます。日本から届いたランドセルは、そんな子どもたちの宝物になり、学校で学ぶきっかけにもなるそうです。アフガニスタンの子どもたちは、周りの人を助け、人の役に立ちたいと思います。アフガニスタンの子どもたちは、周りの人に助けられながら自分の命があることを知っているからだと思います。それは、周りの人に助けられながら自分の命があることを思い、学校に通っていたらどうかと考えました。

そしてランドセルギフトの活動に参加したいと強く思いました。家族に自分の考えや思いを伝えたら、母は、「遠い国で、ランドセルを背負った子どもの姿を見送る幸せなお母さんが増えるのはすごく嬉しい。」

と喜んでくれました。兄と姉は自分たちのランドセルも寄付したいと言ってくれ、三人でランドセルを綺麗に磨きました。父と一緒にアフガニスタンへ送る手続きをしてくれました。家族みんなでたくさんの思い出話をしながら準備をしました。自分のランドセルがアフガニスタンの子どもたちに届き、笑顔や夢に繋がるんだと思うと、とてもわくわくします。海の向こうの国で、私のランドセルを大切に使用してくれる誰かがいると思うと、あの時行動して本当に良かったと心から思います。何かの役に立ちたいと思う気持ちを形にできる機会に出会えたことに感謝しています。

一つ一つの小さな行動が繋がっていけば、世界中が笑顔になるのではないのでしょうか。私は今、中学生です。だからたくさんのお金を寄付することや、被災地に行つてボランティア活動することも海外で活動することもできません。中学生の今、私たちにできることは何でしょうか。命の尊さを心を込めて考え、自分にできることを見つけ、行動していくことではないでしょうか。

私は大切にしている言葉があります。「私が生きている今日は、生きたいと願いながらそれが叶わなかった誰かの今日かもしれない。」という言葉です。私はこの言葉をずっと大切にして、大人になりたいと思っています。

私たちは、世界中の命が繋がっていることを絶対忘れてはいけません。中学生の今、私たちにできることを心を込めて考え続けていきたいと思います。

東京都教育委員会賞



国際人とは

台東区立忍岡中学校 三年

本間樹音

国際人とは、どんな人のことを言うのでしょうか。英語を話せたら国際人？そんなイメージを持つ人も多いと思います。

私の身近な国際人。それは母です。幼い頃から海外に行くと、現地の人と話すのは母の役目でした。流暢に英語を話し、会話する母はまさに「国際人」でした。

その母に、私も「国際人」と言われたことがあります。それは小学校四年生、ラオスに行った時のことです。母と二人でホテルの近くを散歩していると、どこからか子供達の笑い声が響いていました。近づいてみると、私と同じ年ぐらいの子が数人、楽しそうに遊んでいました。「一緒に遊んだら楽しいんだろうな。」そう思っても言葉が分からない私は、ただ眺めることしか出来ませんでした。そんな私の気持ちを察したのか、母が言いました。「遊びたいなら、行ってきていいよ。」

「でも、英語話せないし。」そう言おうとした私の背中はずでに母に押さされていました。私は一人の男の子の前に立っていました。普段なら何気なく言える「一緒に遊ぼう」という一言がどうしても出ません。どうしようー母に助けを求め、目で訴えます。ですが、母は笑つてうなずくばかり。その顔は「出来るよ」と言っているようです。私は思いきつて男の子に言いました。「一緒に遊んでもいい？」

日本語です。身振りや手振りも使い、必死になって伝えました。そして、最初はポカンとしていた男の子が笑って、私を遊びに入れてくれたのです。私は時間が経つのも忘れ、夢中になって遊びました。

その日の夜、母が言いました。

「もうすっかり国際人だね。」
私は「え？」と思いました。

「私、お母さんみたいに英語話せないよ。」
ですが、母は笑つてこう言いました。

「大切なのは英語を話せるかどうかじゃないの。あの男の子と一緒に遊ぼうって言った時、遊びたいっていう自分の思いを一生懸命伝えようとしたんでしょ？一生懸命伝えようとしたから、相手もあなたの気持ちを分かってくれた。心と心で話せたんだから、それは立派なコミュニケーションだよ。だから国際人。」

その時、私は母の言う国際人と私が今まで思っていた国際人は違うということに気付きました。たとえ言葉が通じなくても、相手と思いを伝え合おうとする気持ちでコミュニケーションをとる。それが母の言う国際人の姿だったのです。

来年の東京オリンピック・パラリンピックに向け、外国語を学ぶ人が増えていきます。言葉は重要なコミュニケーションツールの一つで、とても大切なものです。ですが、言葉だけでは足りないのです。私は、さらに心と心でのコミュニケーションが必要だと考えます。例えば、私達自身が自国の文化を理解すること。そして、それを海外から来る外国人の方々に伝え、代わりに私達も相手の国を知ろうとすること。伝え合おうとする心―それこそが、今、私達が持たなければならないもの。国際人への第一歩なのです。

優良賞



心のかべをとりはらおう

東京都立大泉高等学校附属中学校 三年

倉島菜帆

あなたの「外国人」のイメージは、どんなものですか。最初に思いつく顔は、色白で金髪で美形の、アメリカ人やイギリス人ではないでしょうか。日本では、世界共通語である英語だけが小学校から教えられ、英語圏が身近なので仕方ありません。だからといって、「外国人」に対する先入観はこのままでいいのでしょうか。

私は、小学生のときロシアにホームステイに行きました。私は最初、ロシア人に怖いイメージを抱いていました。ロシア人は滅多に笑わず、自己主張がとにかく強くてわがままだと周りが言っていたのです。しかし、実際に私が会ったのは、想像と全く違う人たちでした。みんな優しくして、

「ナホは何がしたい?」

といつも聞いてくれて、自分の意見だけでなく私の意見も尊重してくれました。行く先々で出会う人たちもとてもフレンドリーで、ほとんどロシア語がわからない私にもロシア語や英語で伝えようとしてくれました。そして、よく笑いました。家族と話すとき、友達と遊ぶとき、いつも口角が上がっていて、ロシア人は楽しくても表情には出さないと話に到底信じられません。このことから、先入観のかべを作って「何人だから」と決めつけるのは貧しい考えだと気付きました。何人であれ同じ人間なのだから、性格はそれぞれ違います。大切なのは国ではなく、その人を見ることなのです。

外国人に対しては先入観のかべだけでなく、言語のかべもあります。しかし、同じ言語を話せないと、本当にコミュニケーションがとれないのでしょうか。例えば、トイレにある中国語の注意書きの意味がなんとなく分かったことはありませんか? 遠くにいる人の声が聞こえなくても、表情とジェスチャーで分か

ることがあります。最終的に伝われば、方法は何でもいいのです。

日本では、英語ばかりが教育に取り入れられていることも、外国への心のかべが作られる原因であると考えます。英語には親しみを感ずる一方で、他の国を受け入れづらくなります。多様な考え方や文化を受け入れて、心を豊かにできる可能性を、逃してしまおうのです。世界は日本と英語圏だけではありません。

そこで、普段から多様な文化に触れてみてほしいのです。例えば、洋楽やK-POP、オペラなどの音楽を聴いたり、好きな食べ物の本場など身近な国の文化を調べたりすることです。私は今、普段から外国語の曲を聴いたり、自分の興味のある言語を調べたりしています。また、先入観のかべをなくすため、あまり関わらない人にもなるべく話しかけるようにしています。

1年後、2020年、東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。そのとき、多くの外国人が来日することでしょう。しかし、私たちが彼らを理解して関わろうとしなければ、彼らも日本を良く思わないでしょう。英語圏でない人との関わりも増えると予想される中で、コミュニケーションを恐れてはいけません。今から心のかべを取り払い、自分と異なったものを受け入れられる、豊かで柔軟な心を育てていくことが必要だと私は思います。

優良賞



スマホに使われない

東京都立大泉高等学校附属中学校 三年

瀧 たき
澤 ざわ
結 ゆい

「デジタルデトックス」という言葉を知っていますか。スマートフォンやパソコン、テレビなどの「デジタル」から離れた生活をする事です。情報が膨大にある「情報社会」の現代だからこそ、「デジタルデトックス」が注目されているのです。

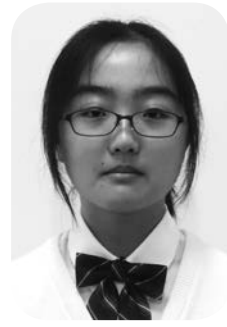
先月、私は父に呼び出され、「スマホの使い方が悪すぎる。ひまな時間はスマホばかりしているじゃないか。自分で制限をかけられないのか。」

と叱られました。私は使いすぎているという自覚がなかったので「別にそんなにやっていないよ。勉強だつてちゃんとしてるし。」と反発しました。しかし、その後自分のスマホの使用時間を見た時、信じられませんでした。一日平均四時間、休日は六時間もスマホを使っていたのです。無意識にスマホを触っているのだと気付き、私は怖くなりました。私は、ゲームなどのアプリは一つも入れておらず、SNSも最小限にしていました。ではなぜ多くの時間を浪費しているのだろうかと思ひ、SNSを開くと、よく見慣れた「あなたの友達がいいねしました」、「あなたへのおすすめです」という文と一緒にたくさんの投稿が目に見え込んできました。これが原因だとすぐに気付きました。自分への連絡を見るだけとSNSを開いたつもりが、気付いたらSNSの他の投稿やおすすめて見て何時間もたっていたのです。スマホを買ってくれたときに母が私に言った「スマホに使われただめ」という言葉の意味がよくわかりました。スマホはあくまで「道具」です。しかし、私のようにスマホを使いすぎている人やスマホがないと生活できない人は「スマホに使われている」のです。とあるテレビ番組で「デジタルデトックス」を実際にアナウンサーが体験す

る、という企画が放送されていました。アナウンサーは山奥の宿に二泊し、その間はスマホやパソコンなどを預けていました。普段、彼は空いた時間にスマホばかりしているそうですが、この二日間には読書をしたり、外を散策したりと落ち着いた生活を送ったそうです。そのお陰で企画前は高かったストレス指数も下がり、「デジタルデトックス」の効果を強く実感したそうです。そのテレビ番組を見てから、私は家族で「デジタルデトックス」に取り組むことになりました。スマホは母にあずけて、浪費していた時間を他のことに使うようになりました。政治経済に関することを自分事として考え、情報源をスマホだけにするのではなく、本や新聞などからも手に入れるようになり、自分の意見を持つようになりました。そうしているうちに一日四時間だったスマホの使用も十五分に収めることができました。「デジタルデトックス」をすることで心にもゆとりが生まれ、落ち着いて物事をとらえられるようになりました。

スマホに頼りきり、考えることをやめた人間は、人間ではありません。「AIが人間に代わる」と言われている今、人間に必要なのは「自分で考える力」です。情報を組み合わせて自分の考えを生み出すことは、人間にしかできません。考える力、感じる力が人間にはあります。その力を生かすためにデジタルデトックスが必要です。「デジタル」から少し離れることで、自分に必要な情報だけを選び抜くことができます。また、その場実際に足を運び、自分の目で見ることで生まれた考えは、あなたにしかない大切なものです。スマホという「道具」に使われると、本当の自分の考えが見つからなくなります。デジタルデトックスはあなた自身の考えを生み出し、人間として生きるために必要なのです。

優良賞



安全な社会作りのために

世田谷区立音花中学校 二年

津留歩花

以前、テレビのニュース番組で「知らない人にはあいさつをしない」という話題が取り上げられていました。私は驚きました。「自分からあいさつをしない」「あいさつは大切です」と教わってきたからです。興味を持ったので調べてみました。

「知らない人にはあいさつをしない」という取り組みは、最近児童が犯罪に巻き込まれる事件が多いことをうけて、始められたようです。小学生の保護者からの意見により、あるマンションではあいさつをすることが禁止になったという投書がネット上で賛否を呼んでいます。私の住んでいるマンションは、同じ階の人の顔はなんとなく分かるので、すれ違えばあいさつをしますし、あいさつを返します。ある小学校でとった小学一年生へ向けたアンケートでは、知らない人に「こんにちは」と言われたらあいさつを返すか、という質問で、あいさつを返すと答えた人が六十六パーセントでした。あいさつを返す人の方が多いですが、圧倒的ではないことが分かります。

私は、「知らない人にはあいさつをしない」という意見には賛成できません。確かに、子供が声をかけられて犯罪に巻き込まれるというニュースも多く目にしますが、あまりに警戒しすぎてしまうのもどうかと思います。ただ単にあいさつをしただけの人が警戒されて無視されたり逃げられたりと不審者扱いされるところというのは、気分が良くありません。警戒するのは悪いことではありませんが、それによって人の気分を害することもあります。注意しなければならぬのは、あいさつをした後です。そのまま通り過ぎれば、心配いりません。しかしその後「お菓子をあげるから一緒に来ない」や「あなたの親が怪我で病院にいる」などといった怪しい言葉を言われたら逃げるなり大人に助けを求めるなりする必要があります。力づくで連れ去ろうとするようなら、大声を出すか、

持つていけば防犯ブザーを鳴らせば周りの人たちも異変に気づくはずですが。

ただでさえ、人とのコミュニケーションが薄くなっていると聞きます。さらにはあいさつまでなくなってしまうのは、自分が危険にさらされているとき、誰も助けてくれないということも起こり得ます。周りのことを知り、周りに知ってもらっている環境を作るために地域のお祭りやイベント、ボランティア活動に積極的に取り組み、「知っている人」を増やしていくべきです。最近、地域のイベントが少なくなり、人との関わりも減っています。自分の周りにどんな人がいるのかを知ることと心配もぐっと減るはずですが、さらに、自分が困っているときや災害があったとき、一人で考えるだけでなく、周りの人と協力することができるといいです。地域社会との関わりを考える、総合支援サイトのアンケートによると地域活動に参加している理由で最も多いのが「社会貢献ができる」次が多いのが「仲間ができる」でした。他にも「楽しいから」「助け合えるから」などがあります。地域の人とコミュニケーションをとることが少なくなっている今こそ、人と関わるべきだと思います。「知らない人にはあいさつをしない」ではなく「あいさつをしよう」と呼びかけてほしいです。「あいさつに続く嘘に注意する」というように教えれば、児童が犯罪に巻き込まれることは少なくなると思います。また、地域活動にも積極的に参加し周りの人を「知っている人」に変えれば、自分の支えになってくれるかもしれません。周りとのコミュニケーションを大切に、あいさつをしつかりとすることで、罪を犯してしまいう状況に置かれている人を一人でも救えるはずですが、あいさつというコミュニケーションは少しづつでも犯罪を防げると私は思います。みんなが安心して生活できる安全な社会作りのために、あいさつは不可欠なのです。

優良賞



「黄色い四つ葉のクローバー」

國學院大學久我山中学校 三年

不破萌瑛

私の部屋には、黄色い四つ葉のクローバーがある。それが私の物になったのは、雨の日の暑苦しい電車内での出来事がきっかけだ。

その日はいつもより比較的空いていて、一つだけ席が空いていた。「ラッキー」と思って私は座り、本を読み始めた。三駅ほど通過した時、赤ちゃんを抱いて、幼稚園に入ったばかりくらいの子供の手をひいた女の人が乗車してきた。赤ちゃんは泣いている。もう一人の子供は外の景色が見たいと駄々をこねている。女の人はとても疲れているように見えた。「誰か席を譲ってあげないのかな、皆冷たいな。」と思っていた。

その時、私は隣に座っているおばさん達が話している内容を聞いてしまった。「ほんと迷惑よね。子供のしつても出来ないなんて、ほんと若い人は……」「ほんとよね。うるさくって気分悪くなるわよ。」

女の人にもその会話が聞こえていたようで、そのおばさん達に謝りに来た。それでもおばさん達は女の人に文句を言っていた。それも落ち着いたのか女の方は元の場所に戻っていった。私は終始、見て見ないフリ、聞こえていないフリをした。それは私だけでなく他の人もそうだった。私はまた、「誰か席を譲ってあげないのかな。」と思った。でも皆、本を読んでいたたりスマホをいじっていたり、寝ていたりと席を立つ気配は全くなかった。私も疲れていたのだから、よく譲りたくはなかった。その後、私の隣のおばさん方は降りて席は空いたが、また別の人が座ってしまった。おばさん方の話し声がなくなった車内はいっそう静かになり、赤ちゃんの泣き声と子供の駄々をこねる声は先ほどにも増して車内に響いていた。「迷惑なんだよ」という声、誰かのため息。そんなことがある度に女の方はうつむいていく。なぜだか不思議なことに、私まで心がきゅ

うくつになつていった。そんな状態に我慢出来なくなった私は意を決して女の人の肩を叩き、

「ここ、座って下さい。」

と言った。すると、女の方は

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

と何度も頭を下げ、駄々をこねている子供を座らせた。私は女の人が、自分ではなく子供を座らせたことに驚いたが、その子が席の上にひざまずいて外を楽しそうに見ているところを見て、「席を譲って良かった。」と思った。その後、赤ちゃんも泣きやみ私が目的の駅に着いて降りようとしたところ

「お姉ちゃん！」

と声をかけられた。ふり向くと、さつきの子が、ある物を私に差し出していた。

それは、黄色い折り紙でおった四つ葉のクローバーだった。私は

「ありがとう。」

と言ってそれを受けとった。不恰好ではあったが、その不恰好さがまだ大人になれていない私を表しているようだった。

その黄色い四つ葉のクローバーは二年経った今でも、私の部屋に飾ってある。私はそれを見る度にあの時のことを思い出す。そして、身体の不自由な人、子供を連れている人、気分が悪そうな人に席を譲ろう心がけている。そして、一人でも多くの人に真似してもらえれば光栄だ。そんな一人一人の勇氣と優しさで平和な世界をつくる事が出来ると思う。また、そんな世界をつくるための第一歩を私は踏み出していきたい。

優良賞



本当の最後のスリッパ

國學院大學久我山中学校 三年

まえだ 前田 華果

大粒の雨が降る日のこと、私は一人で眼科に行った。病院の入口で傘を閉じながら中を覗くとそれなりの広さの待合室に結構な数の患者さんが順番を待っているのが見えた。いざ中に入ると案の定、箱の中のスリッパは全て無くなり、ただ一セットだけスリッパが上がり口に揃えられてあるだけだった。「あっ！」つだけ残っていて良かった。病院に到着するのがあと少し遅かったら、私の分のスリッパはなかったかも……」

と心の中で思い、少しラッキーな気分ではスリッパを履いた。すると、ほどなくして高齢のおばあさんが病院の入口付近にやってくるのが見えた。おばあさんは、中を確認することもなくゆっくりと傘を閉じようとしている。そして、その瞬間、私はハッとした。

「もうスリッパがない！どうしよう！」
診察を終えて帰ろうとする患者さんもなく、スタッフの方も忙しかう用意されてあったスリッパが全て出払ってしまつて玄関に無くなっていることに気がついていない。

「お願い！スタッフの方、気がついて！」
私は心の中でそう叫んだ。最後のスリッパを自分が使ってしまった罪悪感もあったのかもしれないが、こんな雨の日の室内でスリッパがないままだと、靴下も汚れてしまうし、ジメジメと心地も悪いだろう。どうしたらいいんだろう……。短い時間の中でああでもない、こうでもない……と考えていた。

すると、次の瞬間、待合室の椅子に座っていた中年の女性が立ち上がったかと思うと、上がり口にバタバタと行き、履いてきたスリッパを脱ぎ一瞬できれいに外向きにスリッパを揃えて置いた。私は、この女性はもう帰るためにスリッパが必要なくなったのかと思つた。しかし、そうではなかった。その女性は、靴下だけになった足でバタバタと待合室の奥まで行き、今度は座らず何事もな

かつたかのように立ったのだ。入ってくるおばあさんのスリッパがないことに気がついた女性がおばあさんのために、自分のスリッパを脱いで病院の玄関に並べたんだと私はやっと分かった。そして、最後のスリッパを履けたことをラッキーだと喜んでいた自分が急に恥ずかしくなつた。ゆっくり病院の扉を開けて入ってきたおばあさんは並べて置かれてあるスリッパを何のためらいもなく履いて、つだけ空いている席（いや実はスリッパの提供者がいた席）に座つた。大勢いた患者の中でこの一部始終を見ていたのは恐らく私だけだつただろう。

私はほんの一分程度のこの出来事にとでも大きな感銘を受けた。一番素晴らしいところは、中年の女性がおばあさんにスリッパを譲つたということよりもそれを秘かにさりげなく行つたことだ。病院に入ってきたおばあさんがスリッパがないことに気がつき、さあどうしようかと困っていると「さあどうぞ」とスリッパを差し出せばおばあさんにお礼を言ってもらえただろうに、自分が靴下だけになつてまで他人のことを考えて、かつお礼も求めない姿勢は本当に素晴らしいと思う。おばあさんが座るだろうと予測して自分の座つていた席には戻らなかつた女性。こんな素敵な方だからこそ忙しいスタッフの手を止めて、申し出ることもしなかつたのだろう。

「高齢者を大切にしよう」「親切にしよう」そんな日常のモラルの中で人間は欲と戦っている。「ありがとう」と言われたい、ほめてもらいたい。私はこれまでそう思うことがあつた。しかし先程の女性は、欲を持たずに普通でいた。私は短い時間ではあつたけれど、とても素晴らしいものを見た。本当の優しさや心遣いはこうあるべきなのだと実感した。人の知らないところ、見えないところで誰からも認めてもらえない優しさを自分もいつか持つて、当たり前に行つたと思う。本当の優しさこそが世の中に必要なのだから。

優良賞



私達にできること

稲城市立稲城第五中学校 二年

みな
皆川 桜

「大丈夫」って言っていたから何をしてもいいと思った。これはある中学校でいじめが起きた際に加害者、つまりいじめをしていた子が実際に放った言葉だそうなんです。みなさんはこれを聞いてどう思いますか。私は大丈夫が本当ではないかと思っています。一つの言葉、行動が人をどれだけ苦しめるのかを今回は私の実体験を交えつつ話していきたいと思っています。

私がいじめを受けはじめたのは、小学校中学年の時です。理由は「生意気だったから」。確かに班のリーダーになったり、率先して呼びかけたりはしていました。もしかしたらそのことが人を不快にさせたのかもしれない。しかし、私自身やってはいけないことをして反感を買った訳ではありません。こればかりは避けることができませんでした。そこから数年間いじめをうけることになりました。

そのいじめは主に、私が聞こえる距離での悪口、無視、軽い暴力等でした。他にも全員で整列する時、私だけ注意されたりもしました。

無視や悪口を精神的攻撃というそうです。例えば裏で悪口を言ったり、嫌なあだ名をつけたりなどです。精神的攻撃なのか、そうではないのか判断するのは難しいと思います。愚痴と悪口は違います。相手が「嫌だ」と思ったらそれはもういじめだと言われます。私は受け取り方には個人差があると思うので、人が傷つく言葉は言わないに限ると思います。どんなにいじめられキャラを売りにしている人でもずっと言われ続けたら嫌なはずなんです。

私が精神的攻撃の中でも一番辛かったのは無視です。これは最近友達がふと話の中で、

「あの時は、君と話したらお前もいじめ始めるぞって言われてたんだよ。」

と教えてくれました。休み時間は一人でしたが、元々一人でいることは多かったのでそれ程辛くはありませんでした。私は無視していた友達も同罪とは思いません。なぜかというところ、かばうメリットがないからです。かばったところで代わりにその人が傷つくなら、私もそのままの方が楽だと思っていました。どんなに辛く苦しいことをされても私はみんなが大好きだったんだらうなと思います。

じゃあやめてと訴えればいいのではと思うかもしれませんが、でも辛いのです。もし勇気をふりしぼって「やめて」と言えたらどれだけの力があるのか。たとえここで言ったとしても生意気だと鼻で笑われ、更なるいじめにつながるのが恐くてたまらな

に迷惑がかかってしまう。それならば一人でこのいじめを抱えこんでいた方がい

くらかまし、そう思ってしまったのです。だから私は「大丈夫」と言葉を発したのです。このいじめが終わったのは一つのきっかけでした。私がいじめられていると知らない友達に、一度だけ、辛くて今までやられたことを話してしまいました。すると、いつもおっとりとして優しいその子が先生にいじめのことを伝え、先生もとても怒り注意してくれました。それからいじめはぱったりとなくなり少しずつではあります。元の生活に戻っていききました。そのいじめから救ってくれた友達は、あの時先生にいうことすらしづつしていた私に、

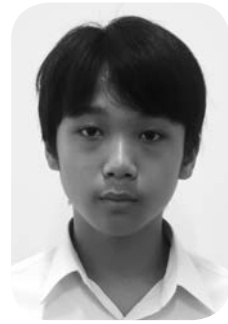
「このままでいいの、悔しくはないの、あなたの人生はあなたが決めるの。」と言いました。今でも鮮明に覚えています。この言葉がなかったらきっと私はここにはいません。先生も定期的に相談にのってくれて私は、なんて素晴らしい人に囲まれたんだらうと思います。

しかし、今までの生活に全て元通り！とはいきませんでした。笑うな。気持ち悪い。」

と言われたから自然にニコッと笑うことができなくなっていました。又、人前で発言をする時や挙手する時にためらうようになりました。「なんでもかんでも発言して反感を買ってしまうのではないか」とか「私なんかが発言してもいいかな」とか考えてしまいます。もちろん発言は自由です。只、心の底でうえつけられているものがたれないままです。しかし私はこの経験のおかげで相手のことを考えてから発言できるようになったと思いき前向きにとらえられています。

私よりもっと辛く苦しんでいる人はいっぱいいます。その人たちがどうしたら救われるのかは分かりませんが、私は周りの環境にめぐまれていたのです。今もみんなが大好きだし、新しい友達もたくさんできました。かばうというのはデメリットがとれないです。次のターゲットにされたり同じくいじめられたり、でもきつかけは作ればいいのです。先生に断片的でも伝えたり、親にどう思うか聞いてみたりするだけでいいのです。私はこの話を書くのをためらっていません。またいじめられそうであることを願ひ勇気を出して書きました。

優良賞



僕達はなぜ学校に行くのか

葛飾区立立石中学校 一年

柳川天我

皆さんは「何故学校に行かなければいけないのか」と考えた事はありますか。

僕はこのような経験をしたことがあります。ある日の夜、母に早く寝るように声をかけられました。僕はまだマンガを読んでいたかったので強い口調で言い返しました。そして十五分位過ぎた頃、また母に声をかけられ、僕は夢中になっていた事もあり、更に強い口調で言い返し、そのまま母と言い合いになってしまいました。

「もう寝ないと明日学校行けないですよ。」

と言われ、母に、

「そもそも何で学校行かなきゃいけないの。」

と大きな声で怒りました。すると母はピタッと怒るのをやめ、

「うーん、そうだよね…、何でだろうね。勉強は必要だし、お友達との時間も大切。集団生活を学ぶ場所でもあるし…。」

と話し始め、僕はあつげにとられながらも、それを聞き何となく納得し、その日は眠る事にしました。

それから何日か経った後、朝起きると枕元に一冊の本が置いてありました。題名は『ぼくたちはなぜ、学校に行くのか。』

「直接的すぎるよ。」と思いました。寝呆けながらパラパラめくってみると、写真集に言葉が書かれているような本でしたが、三ページ目を見た時、衝撃を受けました。そこには『学校へ行きたい』と言ったわたしは、かれらによって、銃で頭を撃たれました。』と書いてあったのです。一瞬で目が覚めました。僕は起き上がり、もう一度初めから、その本に目を通してみました。撃たれたの

はマララ・ユスフザイさんと言うパキスタンの少女でした。そして、マララさんの国連演説が色々な写真と一緒に載っていました。パキスタン、インド、ナイジェリア、アフガニスタン、「学校へ行きたい」「学びたい」と願う子供達が大人や国や戦争のせいで学ぶ事を許されないという話も載っていました。『一人の子供。一人の教師。一冊の本。一本のペン。それさえあれば、わたしたちは言葉をつかう事ができるようになり、声をあげて、世界をよりよいものにしていく事ができるのです。』マララさんの演説の中の言葉です。僕はこの言葉が「なぜ学校へ行かなければいけないのか。」の答えなのではないか、そう思いました。言葉を知らなければ気持ち伝える事はできません。文字を学び、言葉を学び、世界を知る事、それが平和への一歩なのではないかと思いました。僕一人が学校に行つて学ぶ事が、イコール世界平和だとは思いません。それでも僕は、学ぶ事で今まで知らなかった多くの事を知る事ができるし、学んだ知識を色々な場面で役立てる事ができる。そうやって大人になっていく事で、世界平和に貢献できる日が来るのではないか、そんな事を考えるようになってきました。そして、何の疑問も持たず、当たり前前に学校へ行ける今の僕がどんなに恵まれているのかも知る事ができてよかったです。学校へ行く事が嫌だな、面倒だな、そう思う瞬間がこれからもあるかも知れません。でもその時はこの本を、そして、学びたくても学べない子供達の事を思い出そうと思います。

平和な世界で、どの国の子供達も学びたい事を学べる…そんな日が来る事を願い、僕は今日も学校へ行きます。

努力賞

小さな心配りから始めよう

立川市立立川第三中学校 二年

浅井 紗和

私の住む立川市では、公共の公園などを市民のボランティアの方が定期的に清掃してくれています。私の卒業した第七小学校でも、総合学習の一環として、自分たちが住んでいる地域の公園や神社を綺麗にしようということから、みなで清掃に取り組みました。また、電柱にはペットボトルプラントナーによるパングジを飾って町の美化にも取り組みました。

ゴミが落ちていない綺麗な町は気持ちが良いものですが、そんな町をつくることは簡単なことではありません。道端や公園、空き地など、思った以上にゴミが捨てられているのです。以前、ゴミをポイ捨てする心理について聞いた話があります。私の家は桜並木に向かう通りにあり、四月のお花見の時期になるとあちこちから大勢の人が集まります。残念なことに、特に週末明けの月曜日には歩道にペットボトルやお弁当のパック、コンビニのビニール袋など、お花見帰りの人がポイ捨てしていった大量のゴミが残されていました。ある時、ゴミ収集の市の職員の方が、

「人は、『ゴミが捨ててある場所には、自分もゴミを捨ててしまえばいい』という気持ちがおきるからか、あつという間にゴミの山ができて、ゴミを捨てるのが当たり前に感じてしまうのです。」

と話してくれました。「たしかにそうだな。」と思ったので、歩道に捨てられたゴミを見つけた時にはこまめに拾うようにしたところ、ゴミをポイ捨てしている人が驚くほど減ったのです。「誰かが捨てるから自分も捨てていい」という考えに対して、「人がポイ捨てしないように、まずは自分が率先して綺麗な環境づくりを心がける」ということも大事なことなのだと分かりました。

「美しい街」として知られるシンガポールは、多くの罰金制度がある国としても有名です。例えば、ゴミのポイ捨ての初犯は最高千ドル（日本円で約八万円）、チューインガムの持ち込みは、なんと日本円で約八十万円（これは、噛

んだガムを公共の場につけたり、ガムを吐き捨てたりすることを防ぐため）などがあります。シンガポールは、それらの細かい罰金制度があるおかげで綺麗な街並みが保たれているとも言えるそうです。あるガイドブックに、「旅行の際には日本にいる時と同様に、あるいはそれ以上に日本人を代表しているという意識を持ち、マナーに気を使うことを心がけましょう。」と書いてありましたが、たしかに罰金制度がなくても、自分の国を大事に思い、美しさを保っていったら素晴らしいと思います。

昨年ロシアで行われたサッカーワールドカップで、運営スタッフであるオランダ人女性がツイッターに投稿した一枚の写真が大きな話題となりました。それは、日本代表の試合後のロッカールームの写真でした。ツイッターには「これはベルギーに負けた日本のロッカールームです。ベンチやロッカールームをきれいにし、ロシア語で『ありがとう』と書かれたメモまで残していました。すべてのチームの模範だと思います。」とコメントされ、それを見た世界中の人から「日本には品格がある。」「素晴らしいマナー、いつか日本に行ってみたい。」など多くの反響がありました。私はこの話題を通して、感謝の気持ちや相手への細やかな心配りを表すことができる日本人の素晴らしさを知ることができました。

地球をいつも綺麗な街にしていくことは、私たち誰もが持っている小さな心配りから始めることができ、その心の広がり「日本は素晴らしい」と言ってもらえることにつながるのかなと思います。一年後の東京オリンピック・パラリンピックの際に日本を訪れた外国人が、日本の街並み、日本人の心の美しさを感じてもらえたら素敵だと思います。そのためにも、私たちは私たち自身で地域をよりよくしていくことを考え、協力して積極的に行動していきたいです。

努力賞

違いを認めるということ

以前は用いられていたにも関わらず、差別的であると問題視された言葉があります。1980年代のアメリカで、そういった言葉をより中立的に置き換えようと提唱されました。それをポリテイカルコレクトネスといいます。例として、看護婦は看護師に、スチュワーデス・スチュワードはキャビンアテンダントに、置き換えられました。この中立を重んじようという流れは、言葉だけでなくあらゆる分野において、徐々に世界中に拡大しています。

ネットワークの発展により、世界中の誰もが同じ土俵に立ち、それぞれの想いを発信できるようになりました。しかし同時に、配慮に欠けた言動・行動により傷つく人が増え、傷ついた様子が目に見えやすい世の中になりました。それゆえ社会全体が監視しあい、いつも何かに忖度し続けるようになっていて窮屈さが生じています。そうした窮屈な配慮は、今や言葉だけでなく文化にまで及んでいると思います。

文化への過剰配慮を例にあげます。近頃はメリークリスマスが、キリスト教徒以外の人間にとっては不快であるという理由でハッピーホリデーと言い換えられているそうです。「他の宗教を信仰しているから、クリスマスという言葉と文化は受け入れ難い、この気持ちは配慮されて当然だ。」という一方の意見に対し、中立を当てはめようという強制力が働いた結果ではないでしょうか。しかし、このポリテイカルコレクトネスはキリスト教徒から見れば、言葉狩りと文化の否定に他なりません。僕には正しい流れと思えません。

本来ポリテイカルコレクトネスとは、差別をなくし間口を広げる為の考え方を軸としていたはずですが、しかしSNS等が急速に発展する中で、そうした万人への配慮が無意識に独り歩きし、クリスマスの事例のように文化や個性の否定に繋がるのではないかと考えます。

ところで、男女の身体には構造や性質の違いがあり、どれだけ頑張っても、それを完全にフラットにはできません。その違いゆえ生じる向き不向きは確かにあり、そこを否定すると些細な感情のもつれから理不尽な性差別にも発展します。

今年話題となった東大入学式の祝辞では、医学部合格において男子を優位に判定したという社会問題が冒頭に述べられました。僕はその祝辞を何度も読み返し、以下のように自分に当てはめてみました。

僕は今まで頑張ったら報われると思いきや、自身の環境を信じてきた。だが、この先頑張っても報われない不平等な社会が待っているかもしれない。その中に男女の違い、信仰の違い、その他一括りにはできない絶対的な弱さなどが含まれている。そういった理不尽さを怖がらず、弱さの存在を認め支え合って生きていきたい。

大切なことはポリテイカルコレクトネスを当てはめようと、強制力を働かせることではありません。アインシュタインは「平和はただ理解し合うことで達成できる」と述べました。つまりそれは、違いを認め、多様性の視点を持つことが平和的解決の手段であるという意味なのだと思います。なぜ多様性が必要か、それは新しい価値とは異文化が摩擦するところに生まれるからだ、と東大の祝辞は続きます。そこに僕は個性や文化を尊重する大切さを見失わないようにするという願いを添えます。配慮する側、される側両方の視点に立つ意識を持つ、否定に留まらない、適切な範囲でポリテイカルコレクトネスを選択することが出来るようになると思います。他者の立場や心情を思いやる事、それは心を遣う事であり、優しさの表れだと思っております。

青山学院中等部 二年

荒木 征爾

努力賞

私の人生脚本

東京都立小石川中等教育学校 一年

片倉宏海かたくらひろみ

私達の身の回りには、色々な「きっかけ」がありますが、私には人生を変えたいきっかけがありません。

私の顔には、生まれつき赤紫色の大きなあざがあります。そのあざは、「血管腫」と呼ばれ、皮膚の表面近くに血管が過剰に集まり、その血管で皮膚が赤紫色に見えるという病気です。額からほお、口までにも及ぶ大きくて濃い色の血管腫はみんなが驚き、視線を感じることも多くありました。幼い頃は、児童館に行っても母の後ろに隠れ、「僕に話しかけないで。」「僕に気づかないで。」と思っていました。そんなある日、母が「顔を上げて笑ってごらん。隠れているよりも、あざの事を知ってもらえる方がお友達になれるかもよ。」とアドバイスしてくれました。私の人生を変えたきっかけは、この母からのアドバイスでした。幸い、生後まもなくから今日まで続けているレーザー治療のおかげで、あざはだいぶ薄くなりました。

「人生脚本」とは、ある心理学者が唱えた考え方で、幼少期に自分自身で書いた未来の日記のようなものです。人生脚本の大部分は、育った環境や親からのメッセージによるもので、無意識のうちに生き方を決め、それに従い行動するというものです。みなさんは、自分の中にどのような脚本が書かれていると思いますか。例えば、勝利者の脚本はどんな出来事でも良い方向へ進むための踏み台とし、自分をステップアップさせるものだといわれています。苦手な事やつらい事があったとしても、ほんの少しでも前向きな気持ちになって楽しむことができたならば、勝利者の脚本を書いているという証拠になります。物心がつき始めた頃の私は勇気を出せず、母からのアドバイスをすぐに実行することとはできませんでした。しかし、勇気をふりしほりおさるおさる実行してみると、最初はとまどっていた友達も、私が笑顔で話しかけたことで私のことをしだいに受け入れてくれて、みんなにまざって遊ぶことができるようになりました。それまで敗北者の脚本を書いていた私が勇気を出して心を開くことで勝利者の脚本に書き替えた瞬間だろうと思います。

それからの私は、書き替えた自分の脚本を生かして様々なことに挑戦しています。なかでも特に興味を持って挑戦しているものは、外国語の学習です。私は何に挑戦しても自然と楽しんで行うことができる長所を持っていると思います。ですから、興味を持った英語には別格の楽しさがあります。勉強した英語の全てが自分でも驚くようなスピードで身についていき、さらに難しい英語に挑戦したいという欲求も生まれてきました。

私の学校では、オーストラリア語学研修やシンガポール・マレーシアへの修学旅行の他、色々な国の中学生・高校生と国際交流を行っています。以前目にした記事に、次のような内容がありました。「国際化社会、つまりグローバル社会を生き抜く力が必要である。」と。グローバル社会とは、国家や地域と関係なく、世界が一つの国と考えることです。ならば、当然言語のかべがあると思います。私は英語の実力を着実にのばしていき、グローバル社会で言語のかべをくずし、国と国の橋わたしができるようになりたいと思います。

下を向いていた幼い頃の私はもういません。今の私は顔を上げ、友達をたくさんつくり、学校を楽しんでいます。「英語」という好きなものを見つけたことができました。今後も英語を極め続け、私の将来の夢であり、海をこえて国と国をつなぐ役割でもある国際線パイロットになります。そして、幼い頃の自分の行動に自信を持ち、自分の人生脚本が「勝利者の脚本」であることを信じてどんな努力もおしまずに目標に向かって毎日を大切に歩んでいきます。

I want to make a lot of friends
who can understand each other, and I
will do my best to play an active
part in the world.

(訳) 私はお互いを理解できる友人をたくさんつくりたいです。そして、私は世界で活躍するために全力を尽くします。

努力賞

心の目で見よう

立正大学付属立正中学校 一年

神本真宏
かみもとまさひろ

皆さんは、目をつぶって歩いてみたことはありませんか。真つすぐ歩くのも難しく、怖くて思わず目を開けてしまいます。十メートル歩くのにも苦労します。この見えない世界が視覚に障害がある方々の日常なのです。

僕が四年生のとき、神奈川県にある盲導犬訓練センターから、盲導犬とそのユーザーの女性、盲導犬訓練士の方が学校に来てくれました。初めて近くで見た盲導犬は、ゴールデンレトリバーという種類の大きな犬で、とてもおとなしくて、人間の様子をじっと観察しているように見えました。

盲導犬の主な仕事は、「角を教える」、「段差を教える」、「障害物を教える」の三つです。カーナビのように、目的地まで連れて行ってくれることはありません。盲導犬ユーザーの方々は、目的地までの道のりを頭の中で考えながら、盲導犬に指示を出しているのです。

僕は、盲導犬と歩く歩行体験をしました。黒いアイマスクをして、真つ暗な中を、自分と盲導犬をつなぐハーネスだけを頼りに歩きます。盲導犬への指示は英語です。「GO」と声をかけると、盲導犬はゆっくり歩きだしました。僕は壁にぶつかりそうで、足がすくんでしまいました。盲導犬と歩くということは、一緒に歩く練習を重ね、犬との信頼関係が必要だということが分かりました。

歩行体験をした後に、盲導犬ユーザーの方からたくさんのお話を聞きました。特に印象に残っているのは、障害物をさけて右側に寄ったときに、トラックのサイドミラーに顔を強くぶつけて大げがをされた話でした。あまりの痛さに顔に触ると、ヌルリとして、顔が血だらけになっていたそうです。盲導犬は障害物をよけることは出来ませんが、目線より上の障害物に気付けないことがあるそうです。さらに、盲導犬訓練士の方から、「困っていいような人がいたら声をかけて欲しい」というお話もありました。

それから数か月経った頃、駅で盲導犬を連れてくる女性を見かけました。駅は大規模な工事を行っていて、構内は狭くなっており、利用できない階段もあ

りました。盲導犬を連れてくる女性は、端の方で動かず、何かを考えているように見えました。誰かと待ち合わせをしているのか。それとも、困っているのか。僕は声をかけるかどうか、心の中で何度も迷いました。でも、今こそ勇気を出して声をかけるときではないのか。盲導犬訓練士の方の話を思い出していました。

「すみません。何かお手伝いすることはありますか。」

と優しく肩をたたいて、声をかけました。すると、

「はい。久し振りに来たら、駅の様子が変わって。山手線の乗り場が分からないでいます。」

と答えてくれました。

僕は、山手線の乗り場まで、女性を案内しました。僕のひじ辺りをつかんでもらい、少し前を歩きました。混雑している駅は、みんな急いで歩いているので、僕でさえ何人も人にもぶつかりそうになりました。盲導犬ユーザーの方々は、盲導犬と歩いていても、きつと不安になることがあると思います。僕は声をかけるまで時間はかかってしまったけれど、困っている方の力になれたことは、うれしいことでした。

盲導犬はとても優秀ですが、人間と同じように周りの安全を確認したり、文字を読んだりすることは出来ません。歩く手助けはしてくれりけれど、危険を的確に察知するには限界があるのです。

視覚障害者の方の約四割が駅ホームでの転落事故を経験しているそうです。混み合うホームで、見えないとはどういうことなのか、想像してみてください。危険を言葉にして伝えることが出来るのは、僕たちです。みんなが困っている方に、積極的に声がけのできる世の中になって欲しいです。

相手の気持ちを想像し、勇気を持つことが、社会を変える第一歩になるのではないのでしょうか。

努力賞

「聞くこと」の大切さ

杉並区立井荻中学校 二年

小原英佳

みなさんは普段「聞くこと」にどのくらい意識を向けているだろうか。きっと多くの人が「話すこと」には意識を向けているだろう。だが、「話すこと」よりも「聞くこと」の方が重要だと、私は考える。

小さい頃、私は「聞くこと」が大の苦手だった。まず、人の話を最後まで聞くことができなかった。相手が話している途中でも、自分の言いたい事があるといつも割り込んでしまっていた。また、自分とは異なる意見を受け入れる事もできなかった。だがそれは決して、自分の意見が絶対に正しいと思っていたわけではない。ただ自分の意見をどうしても通したかった。だから、いつも相手の意見に対して「でも」と言ってしまう、喧嘩になることもよくあった。

小学校中学年になると、だんだんと人の話を最後まで聞けるようになった。また、自分とは異なる意見が出て、すぐに「でも」とは言わなくなった。だが内心、「この意見はおかしい」「絶対間違っている。」などと思っていた。今思えば、当時の私には思いやりの心というのはほとんど無かったのだと思う。

そんな状態のまま、私は中学校に入学した。中学生になってから人間関係に悩む事が多くなった。例えば部活動。私はテニス部に入学した。部員数も多く、全体では六十二人にもなった。一年生の女子だけでも十四人いた。人数が多いと、互いの存在がよい刺激となり、切磋琢磨し合って全体の技術向上につながる事ができるという良い面がある。しかしその一方で、人数が多いが故に、お互いに異なった意見を持つ事が多く、何かと衝突することも多かった。そして、その度に部活内の雰囲気はだんだんと悪くなっていった。この事を受けテニス部では、一度一年生の女子全員で集まって話し合いをすることに決めた。ここでも初めのうち、私は自分の意見を言う事しか考えていなかった。

そのため、自分の考えと異なる意見が出た時には、否定的な捉え方しかしていなかった。だが、多くの人の意見を聞いていくうちに「自分一人の意見は、とてもかたよった考え方にすぎなくて、物事の一面しか見られていない。」という事に気付く事ができた。そして、物事を客観的、また多面的に見る事が私には必要なのだと思う。そのための第一歩として、まず、人の話をよく聞くようになった。すると、なぜ部活内で衝突する事が多かったのかが、だんだん分かってきた。当時は「部活を頑張りたい人」「楽しみたい人」また「そのどちらも」など部活に対する姿勢や考え方が人それぞれ違っていた。だから、それを理解できずに、衝突してしまう事があったのだ。その後、このような衝突を防ぐために、みんなで「テニス部での心構え」を決めた。実際、この心構えによって全ての衝突が防がれているわけではない。だが、それ以上に、相手の話をよく聞き、理解し合えたという事が、私にとっては大きな進歩だったと思う。

「聞くこと」で得られるものは、自分の頭の中だけで考えて得られるものよりもはるかに多い。もちろん、自分の頭で考えるという事もとても大切だ。だが、自分の頭で考えるだけでは、かたよった見方、考え方になってしまいがちだ。だから、人の話をよく聞き、自分には無かったものを新しく取り入れる事で物事を客観的、また多面的に見ることが必要なのだと思う。そうして物の見方や考え方が広がれば、相手の事を考えたり、思いやりたりできるようになり、結果として「話すこと」も上手になるのではないだろうか。相手とのコミュニケーションにおいて、「聞くこと」が果たす役割はとても大きいのだ。

もしもあなたが、「聞くこと」もしくは、「話すこと」が上手になりたいのであれば、一度相手の声に耳を澄ましてみてはどうだろうか。

努力賞

知的障害についての理解を

立川市立立川第四中学校 三年

西山智春
にしやまち はる

何故、知的障害は身体障害と違い、理解が広まらないのだろうか。

私はそれについて、知る機会がないからだと思う。正しく理解される為に、学校等で、身体障害だけではなく、知的障害についてもしっかりと教えるべきだと私は考える。

学校では、パラリンピックのことや福祉学習のことで、身体障害について理解を深める為の取り組みが多くなされている。それは非常に良いことだ。しかし、一つ、疑問に思う点が私にはある。私達は今まで、知的障害について、深く学んだことはあったのだろうか。私は、全くと言って良い程無かったと思う。私達はきっと、教わらない限りほとんどの人が知ろうとはしないだろう。それでは一向に理解が広まらないのだ。

身体障害は、見た目でもわかりやすい為に、気づかいがしやすい。しかし、知的障害は見た目でもわかりにくい。その上、あまり理解もされていなかったら、私達は心無い感情を抱いてしまわないだろうか。その人が手助けをしてもらいたいとき、私達はそれに気付き助けることができるだろうか。気付けなかった時、その人はどう思うだろうか。きっと、プラスな感情は抱かないだろう。

私が述べた、『学校等で、身体障害だけではなく、知的障害についても教えるべきだ』という意見について、学校等はどう思うだろうか。都合や事情があつてできないのかもしれない。授業時間確保の為にできないかもしれない。簡単なことではないだろう。けれど、それ以外にも、身体障害と同じように、知的障害がある人にも学校へ来て頂き、お話をしてもらおうのも難しいだろう。知的障害がある方自身が、自らのことを大勢の前で伝える。それ自体も、知的障害がある方にとっては難しいかもしれないからだ。

現在小学四年生の私の弟は、知的障害を抱えている。彼は、小学四年生ではあるが、「アンパンマン」位しかはつきり話せず、ジェスチャーで伝えてくる。本当年的と、精神年齢とが一致していないと考えればわかりやすいだろう。

そんな彼は、都内の支援学校に通っている。一クラスが片手で数えられる程の人数で、障害の程度で分けているようだ。そこでは、小学校との副籍交流や、五年生の時に行われる私立小学校との交流美術館見学等、障害がある人となない人とが関わり合う機会をつくっている。弟も実際に、近くの小学校に行き、同じ学年の児童とお楽しみ会等で交流した。

そこまでのことをするのは難しいと思うかもしれない。しかし、知的障害の特徴や、出来にくいこと、どう接するか等、先生方が説明し、教えることは、そう難しいものではないと思う。そういった工夫をし、私達に、知的障害についての正しい知識を教えてほしい。

私は、学校等で知的障害についても教えるべきだと考える。そのことについて、教育委員会や、学校でも検討してほしい。

私は、障害がある人と、ない人との差別や、知識不足で相手のことを誤解してしまうようなことがあつてはいけないと思う。障害がある人の負担をできる限り軽くしていきたい。そうして、障害がある人となない人との関係なく安心して暮らせる立川市を創っていきたい。

努力賞

「災害から命を守るために」

あきる野市立五日市中学校 二年

萩 原 樹
はぎ わら たつき

昨年の夏は、猛暑、集中豪雨、台風の逆走などにより大きな災害が発生し、多くの犠牲者が出ました。その中には、多くの高齢者がふくまれていました。これは、今までの経験、記録や知識では、計る事のできない事態だったそうです。これが結果的に大きな被害につながったとの報道がありました。このような状況で災害から命や生活の場を守る事ができるのだろうかと思いました。

これらに対する基本的な対策は、市や国がやる事です。しかし、地域で生活するお年寄りや体が不自由な人の命と生活を守るためには、地域の協力は重要であると思ひ、僕達中学生にできる事、しなければならぬ事は、何かないかと思ひました。

最近、国際的な異常気象により、各国で大きな災害が起きています。一昨年四月に南米北西部の大雨や六月にパキスタン・インド北西部の熱波などが挙げられます。これらは、主に地球温暖化現象が原因といわれています。

一方、国内は昨年の七月の豪雨により死者約二百二十人、住宅全壊約三千八百戸、床上浸水約千四百戸などの大きな被害が起きました。この被害で、特に僕が注目したのは被害が起きた場所と、被害者の年齢です。山間部の人口が減少している地域で、高齢者世帯が多い場所でした。この事は他人事ではなく、僕らが住む、あきる野市五日市地域も当てはまると思ひました。いつ、僕達が住む地域でも、大きな災害が、起きてもお不思議ではありません。そのような時の問題点を考えてみました。一つ目に、情報が早く正確に伝わるか。二つ目に、伝わったとしても早く正確に行動できるか。三つ目に、行動を早く正確に行うための、サポート体制がととのっているか。少し似ている事です。三つとも災害時にとっても重要だと思ひました。そこで、この疑問を解消するため

に市のホームページで災害時の対応について調べました。しっかりした計画や、地域組織がありました。特に、地域の団体が大きな役割を担っている事に安心しました。しかし、災害時に的確に機能するか、しないかにかかっていると思ひます。住民が真剣に考え、行動しなければ、計画の効果はないと思ひました。

そうならないように、僕達中学生に、できる事はないかと考えました。僕なりに考えた事で二つ大切だと思ひました。一つ目は、地域の防災訓練や清掃に参加し、地域社会との関係を深めて、地域のお年寄りに知ってもらう事と、知る機会を少しでも多くする事です。災害時には、信頼関係がとても重要です。二つ目に、その上で地域の防災組織に、中学生が出来る事を明確にしてもらい少しでも役だつ事を一歩一歩やっていく事が重要だと思ひます。

僕たちの登下校は、地域の皆さんの見守りにより守られています。僕たちも災害時に、最も弱い人達やお年寄りの人を助ける事は、日頃の恩返しになります。子供が減っている中で、地域のお年寄りに「中学生たちもなかなかやるなあ。」そんな風に思ってもらえたら助け合いを基本とする、より住みやすい地域になっていくと思ひます。

これからは、中学生の僕たちだからこそできる事を頑張つてやっていきたいと思ひます。

努力賞

介護

立川市立立川第四中学校 三年

平島 弥奈

「理想と現実」その狭間に置かれることが段々と増えてきた。そしてこれから大人になる中で、その立場に置かれることは増え、悩むこととなるであろう。そう考えるに至ったある体験を、今回述べたいと思う。

私が産まれた時、五人の曾祖父父母と高祖の子がいてくれた。幼稚園で敬老の日の絵を描くとき、私は曾祖父父母を描いた。私が幼かった頃は、動物園に連れて行ってくれたり、一緒に遊んでくれたりと、元気だった曾祖父父母だったが、段々と年老いていく中で、帰省して会える場所が家から病院のベッドへと変わり、食事の面や家の造りもバリアフリーではないので、施設に入所することになった。その際私も引越しの手伝いに行ったが、何十年と住み続けた我が家を離れることとなり、これから始まる生活に不安を抱いている曾祖父父母の顔は未だに忘れることは出来ない。一方引越しの荷造りをする祖母の後ろ姿も、悲壮感が漂っていた。

入所日当日も、決して新生活の始まりというキラキラしたものではなかった。突然環境が一変した曾祖父父母は、物の置き場等、些細と思われれることへの対応すら困難なようで、祖母の携帯は、常に鳴っていた。

それでも、元来明るく社交的な曾祖母は、実姉が先に入所していたこともあり、施設内で行われる毎日の運動やイベント等にも積極的に参加していたが、学者だった曾祖父は人と交わることも苦手で、年寄り扱いされることをとても嫌がり、食事以外は部屋から出ようとせず籠り気味となり、何かある度に祖母に家へ連れて行くよう言っていた。

たしかに、曾祖父父母は両親を家で看取っていたし、その時代はそれが当然だったのかもしれない。また、そう出来るのであれば、住み馴れた我が家で最期を迎えることができ、家族みんなに見守られ幸せだと思おう。だが、核家族化が進み、元々同居ではなかったりもするし、女性も外で働くようになり、何より高

齢化が進み、老々介護という言葉も耳にする昨今、自宅での介護というのは決して簡単なことではないと思う。施設に入所させることで、厄介払いをしたかのようにほとんど面会にも来ないような家族がいることを、曾祖父父母のケアマネージャーさんから聞いたことがある。そのような方がごく寂しそうにしていることも。実際、曾祖母が入院していたとき、お見舞いに行くとなースセンターの横の面会スペースにいつも一人でおばあさんが居て、私が行くとても喜んでくださり、色々なことを話してくださった。もしかしたらその方のご家族は、お仕事だったり、遠方でなかなか来られなかったのかもしれない。しかし、私の祖母を見る限り、介護というのは決して楽ではなく、祖父側の曾祖母の病院には高速道路を使い片道二時間かけて、週一回は通っていたし、施設は自宅から車で十分の場所ではあったが、寂しがる曾祖父父母に毎日のように会いに行き話をすると、最低でも一時間は滞在していた。時々、「今日はちょっと疲れたから施設に行くのは止めようかな。」

と言いながらも、行かないことに罪悪感を感じていると、母から聞いたこともある。

高齢化が進む今、誰にでも起こりうる介護の問題。介護する側される側、それぞれに想いがある。願い通りに最期まで看続きたい。住み馴れた場所で最期を迎えたい。けれど現実問題、理想通りにいかないこともある。終わりのない介護。終わりを待つことは、死を待つことになる介護。何が正解かは誰にも分からないからこそ、そのときに直面する前にそれぞれの立場になり、それぞれの想いに歩み寄りながら話せることが出来たらいいと思う。

曾祖父父母の本心は分からないが、最期に見せてくれた笑顔と温かい手の温もりを一生忘れないことが今の私に出来ることだと思おう。

努力賞

努力から学ぶこと

「努力は必ず報われる」「努力は裏切らない」よく耳にするこの言葉、名言などを、みなさんは信じますか？少し聞き方を変えて、信じていますか？私は最初信じていることができませんでした。「努力は無駄」そんなことばかり思っていました。勉強ができる人、頭がいい人はもとの才能があると思うし、スポーツが得意な人はうまれつき身につけているのではないかとそんなことばかり思っていました。例えば、野球をやっている人、素ぶりを何千回、何万回やったら、大事な大会で完璧にホームランが打てますか？バスケをやっている人はシュート練習を毎日していたら試合で百パーセントシュートを決めることができますか？野球もバスケもサッカーも水泳も陸上だって、その試合で、その大会で、やってきた努力が全て発揮できるとは限らないと思います。そう考えてしまう私には一つの理由があります。

私は陸上部に入っていて、種目はなかなかみんなが聞かない砲丸投げ。知っている人も少ないし、周りから見れば、なにあの競技って思われると思います。トラックでやる走る競技の短距離や長距離、ハードルなどはちがいがいい、腹筋・背筋・足腰が強く、腕の力がないと投げられません。二、七kgの鉄の玉をどれだけ遠くにとばせるかをきそいあいます。

私が砲丸を始めたのは中学一年生の九月頃。初めて砲丸をもったときは、こんなに遠くにとばせないかと思っていました。次の日は全身筋肉痛でベッドから起き上がることもできなくなっていました。それでもやってみようかと思いましたが、一年生の時にでた連合陸上では二年生と共通の中、三位になりました。そして冬には東京都代表の強化選手にも選ばれ自分のダメなところを教えてもらい、アドバイスも沢山もらいました。二年の春、シーズンスタートの大会ではベスト記録も出すことができ調子が良く、楽しく砲丸をしていました。ですがそこからの流れは一気に変わりました。二年生の五月。胃腸炎になってしまいい八月までに、体重は十一kg落ちました。ご飯もぜんぜん食べられなくなり、筋肉や力も全てなくなり、砲丸の記録も二m三mおちてしまいました。そ

こからは食べても体重をもどすことはできず、二年生の連合陸上では一年生に負けて二位。自分はどうすればいいんだろうと悩むことも多かったです。十一月シーズンラストまでベスト記録を出すことはできませんでした。シーズンが終わりいよいよ冬季練習。人一倍努力をしようと思いました。一万投以上投げこもうと先生とも約束し頑張ろうと思いました。けれど冬季練習にはいつて一ヶ月。十二月に足が痛く、病院にてMRIをとりました。医者から言われた言葉は全治四ヶ月の疲労骨折。しばらくの間、松葉杖生活。このとき初めて、「無理なんだ。努力はもう必要ない。」と思いました。やってきたことは無駄なんだと思うことしかできませんでした。東京選抜も落ちて泣いてばかりいました。でも座りながら投げ三年生のシーズンで後悔しないようやることは全てやりきりました。足が使えなくてもできることは沢山ありました。そして三年生。五月の都大会の地域別の予選。ここで記録を出さなければ都大会へ行くことはできません。本番は三投だけ。いよいよ一投目。先生との約束は一投目で都大会への進出を決めること。やってきた全てのことを信じ投げました。今までで一番強い気持ちもてました。結果は都大会進出。一投目で決めることができました。二投目にはベスト記録もだせました。やっと自信がもてました。砲丸をやってはじめて、「自分はやれた。」と思うことができました。本当によかったです。この結果をもとに、「努力はなんなのか」ということを、もう一度考え直しました。私自身が思う努力はひたすら頑張ればいいものじゃない。けがをするのも努力。泣くのも努力。一つ一つやりとげることが本当の努力だと思いました。そしてその努力はいつあらわれるかわかりません。一年後二年後…あるいは十年後、つみかさねてきた努力の数で変わると思いました。だからこそ今あるこの瞬間を頑張ろうと思います。努力が全てじゃないけれど、努力してきた分結果はあると信じて今日もこれからも頑張りたいです。そして最後に：「努力は裏切らない。」

葛飾区立葛美中学校 三年

山本結加

努力賞

死について

國學院大學久我山中学校 三年

やまもと
山本陸斗

小学校五年生のときだ。その日は「六年生を送る会」という行事があつて、一つ学年が違う五年生も卒業式に出席しなければいけなかった。部活がなく、上級生との接点が少ない小学生にとって、その式は退屈極まりないものだったが、一ヶ所異色の雰囲気をただよわせている卒業生がいた。

名前が呼ばれると同伴していた両親らしき二人が立ち上がり、彼の車いすに手をかけた。そしてそのまま用意されていたスロープを使って、壇上まで登っていく。

この一連の動作に、会場は何ともいえない空気に包まれた。事情を知っているらしい六年生たちは神妙な顔をしている。

校長先生の答辞が終わると、その後、式は何事もなく終わった。式は退屈なままだったが、僕の心にはあの卒業生の姿が焼きついていった。

春休みが明けるとすぐ始業式があつた。進級して新六年生になったときもあの六年生を忘れられずにいた。その後、校長先生の話で、すべてを知った。彼は肝臓の病気で入院していて、学校に来られなかったらしい。そして卒業式に出席して二ヶ月後には亡くなっていたのだという。

それを聞いて僕はあの日の卒業式のことを思い出していた。あの卒業式は彼にとってどのようなものだったんだろう。僕たちにとっては退屈でつまらないあくびの出るような式だったけど、彼には違う目で見えていたにちがいない。

人生を十二年で終えた彼と残された両親を想うと、あの場で十メートルも離れていない位置にいた僕たちにとって、とても他人事ではないような気がした。

もし自分がもう余命いくばくもない状態におちいったとしたら今までのことも未来のことでもどうでもよくなると思う。そして、卒業式に出席して、自分の

過去と未来に向きあつてがんばっているんだと思った。彼は両親に支えられていながらもけん命に生きた。僕はそれに立ち会えて幸せだと感じた。

この国は自殺者が多い。未来に希望を見出せない人が自殺してしまうのかもしれない。

僕は彼の件を経て、この問題に対する見方が変わった。健康な若者が自ら命を捨てるとするのは異常なことなんだと再確認した。

人生何が起こるか分からないし、テレビのニュースで起こったことが自分の身にも起こるかもしれないし、大切な人を突然亡くすかもしれない。なので、後悔しないよう、未来への希望を失わないように歯を食いしばって生きようと思つた。

僕は彼と出会って自分の考えが大きく変わった。直接話したことも、名前を知っている訳でもないのに、他人に影響を与えたのはすごいと思う。僕も彼みたいな生き方をしてみたいと思つた。

審査員長講評



東京女子体育大学名誉教授

尾木和英

審査に当たった者を代表して一言申し上げたいと思います。

御参加の皆様方も接してみてお分かりになられたとおり、ここにいる十人の皆様方は、今回、この中学生の主張東京都大会にチャレンジしてくださった五、七八四名の皆様方の代表に値する立派な発表だったと思います。

それぞれの皆様が自分の身の回りにある難しい問題に鋭く目を届かせ、そして、中学生らしい新鮮な目で問題を捉え、思いを切々と訴えかけてくださいました。捉えた問題に対して、どの側面に重点を置くのかを考え、自分の経験を踏まえて主張する。このことは、簡単なことではございません。それぞれが、大変な思いをされたことと思います。発表者の方々だけではなく、努力賞を受けられる十名の方々を含む応募された五、七八四名の中学生の皆様が、積極的にそうした価値ある経験に取り組まれました。自分の主張をまとめるというチャレンジをしたことに対して、まず心から拍手を送りたいと思います。

特に、発表してくださいました十名の方々につきましては、自分でまとめた内容や思いを、さらに声に託してこの会場に届けるために、努力されたと思います。自分の言葉で、自分の思いを込めて、訴えかけをする。その中で、話の構成や言葉選び、会場にいらつしやる方々への伝え方といった点を、それぞれが工夫されておられました。

知事賞に選ばれた藤田大悟さんについては、ご自身の貴重な経験を通

じて、自分の言葉で考え、人と人との心の通じ合いとは何であるかということを、力強く主張してくれました。主張の中で、自らの経験を通して気付いたことを、『自分が障害者だから自分を理解してもらおう』と相手にばかり求めるのではなく、自分も心を開いて相手を受け入れる必要がある』と語ってくれました。経験を通して自分で気付き、障害という枠を超えクラスメイトと通じ合うまでの過程を力強く主張されたことが、審査にあたる我々の心を捉え、受賞につながりました。

十名の発表者の方々、努力賞を受賞される方々、今回応募なさった中学生の方々は、本大会に向けて積極的にチャレンジをしてくださいました。ぜひこのことを自分でもう一度確かめていただきたい。自分はこの貴重な経験をした、こんなことが自分ではできたということ、ぜひ自信にしていきたいと思えます。その自信を明日からの生活に活かして、私の希望としましては、近い将来大人になったときに、この社会を支える力として自分の素晴らしい生き方を切り開き、力を発揮していただきたいと思えます。その希望を述べまして、私の講評に代えさせていただきます。

本日は本当におめでとございました。

令和元年度「中学生の主張東京都大会」の概要

- 日 時 令和元年九月八日（日曜日）午後二時から午後五時まで
○ 場 所 東京都議会議事堂一階 都民ホール
○ 主 催 東京都

開 会

- 一 あいさつ 東京都生活文化局都民生活部長 金子 光博
二 中学生の主張 十名

―休憩（審査）―

三 表彰式

- （一）審査結果発表 審査員長

尾木 和英

- （二）表彰状贈呈

閉 会

○ 審 査 員

- 尾木 和 英 （審査員長）東京女子体育大学名誉教授
長田 渚 左 ノンフィクション作家
井門 明 洋 東京都公立中学校PTA協議会会長
西川 さやか 東京都教育庁指導部主任指導主事
金子 光 博 東京都生活文化局都民生活部長

○ 審査基準

（一）論旨・内容について

- ア 中学生らしい新鮮な主張であるか。
イ 個人の感想や体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。
ウ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか。
エ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。
オ 表現が適切であるか。

（二）論調・態度について

- カ 声、言葉は明瞭で聞きやすいか。
キ 話しぶりに熱意と迫力があるか。
ク 主張の内容が、聴衆に共感と感動を与えているか。
ケ 聴衆をよく見て、落ち着いて話したか。

【参考】令和元年度 中学生の主張東京都大会 募集概要

1 応募資格

東京都内に在住または在学の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。

(平成31年4月1日現在)

2 テーマ

- (1) 社会や世界に向けての意見、未来への希望や夢、提案など。
- (2) 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
- (3) テレビや新聞等で報道されている社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、自由にユニークな飾り気のない言葉でまとめたもの。1,400字から1,800字までの字数で4枚ないし5枚の原稿用紙（400字詰め）に書かれた、縦書きの作文とする。

3 締切

令和元年7月19日（金曜日）

4 審査及び表彰

主催者において、大会の前に中学生の主張東京都大会発表者（出場者）10名及び努力賞10名を選考する。大会当日に出場者10名が、応募した原稿に基づいて5分程度の発表を行い、審査員の協議で知事賞（1名）、東京都教育委員会賞（2名）、優良賞（7名）を選考した後、努力賞を含む各賞受賞者に対する表彰を行う。

なお、発表者及び努力賞入賞者については、8月頃に学校を通じて結果を通知する。

5 その他

- (1) 知事賞受賞者を、独立行政法人国立青少年教育振興機構が主催する「第41回 少年の主張 全国大会～わたしの主張2019～」の出場候補者として推薦する。
- (2) 応募者全員に、参加賞として記念品を贈呈する。
- (3) 受賞作品を発表文集にまとめ、学校等へ配布する。
- (4) 受賞者の写真、氏名、学校名、学年及び作品名を、東京都のホームページと発表文集に掲載する。

応 募 状 況

1 今年度の応募状況

(単位: 人、校)

| 応募者数 | | | | 応募校数 |
|------|-------|-------|-------|------|
| 1年生 | 2年生 | 3年生 | 計 | |
| 988 | 1,935 | 2,861 | 5,784 | 52 |

2 過去の応募状況

(単位: 人、校)

| 年度 | 応募者数 | 応募校数 | 年度 | 応募者数 | 応募校数 |
|-------|------|------|----|-------|------|
| 昭和 54 | 219 | - | 11 | 491 | 37 |
| 55 | 184 | - | 12 | 639 | 42 |
| 56 | 265 | 37 | 13 | 797 | 41 |
| 57 | 454 | 40 | 14 | 562 | 37 |
| 58 | 142 | 27 | 15 | 736 | 48 |
| 59 | 169 | 39 | 16 | 1,961 | 60 |
| 60 | 230 | 40 | 17 | 1,552 | 58 |
| 61 | 289 | 58 | 18 | 2,230 | 84 |
| 62 | 509 | 79 | 19 | 1,919 | 86 |
| 63 | 527 | 80 | 20 | 2,276 | 79 |
| 平成元 | 742 | 102 | 21 | 4,105 | 105 |
| 2 | 326 | 70 | 22 | 3,153 | 98 |
| 3 | 355 | 67 | 23 | 1,864 | 77 |
| 4 | 472 | 69 | 24 | 3,316 | 93 |
| 5 | 385 | 36 | 25 | 3,739 | 72 |
| 6 | 280 | 53 | 26 | 8,446 | 97 |
| 7 | 259 | 48 | 27 | 9,983 | 95 |
| 8 | 230 | 40 | 28 | 8,620 | 95 |
| 9 | 500 | 58 | 29 | 7,781 | 70 |
| 10 | 739 | 45 | 30 | 6,878 | 62 |

過去の入賞者（直近3年間）

平成28年度（第38回） 平成28年9月11日・東京都庁大会議場

| 賞 | 作品名 | 学校・学年 | 氏名 |
|-----------|----------------------------|-------------------|-------|
| 知事賞 | 感じる | 杉並区立井荻中学校・3年 | 今本 吉治 |
| 東京都教育委員会賞 | 母への言葉 | 葛飾区立四ツ木中学校・3年 | 牛久 友萌 |
| | 命の大切さ | 荒川区立第七中学校・2年 | 吉田 真萌 |
| 会長賞 | 人のことを考える | 足立区立六月中学校・3年 | 相場 弘貴 |
| | あいさつの人 | 渋谷区立原宿外苑中学校・3年 | 池山 明恵 |
| | おもてなしの国、日本 | 東京都立桜修館中等教育学校・1年 | 今井 一輝 |
| | 命への感謝 | 立川市立立川第六中学校・3年 | 小林 岳 |
| | ぼくが一人で電車に乗れるようになるまで | 共栄学園中学校・1年 | 榊原 丈稀 |
| | 弱小野球部の軌跡 | 世田谷区立用賀中学校・3年 | 白井 蓮 |
| | 言葉とナイフと ^{たましい} 霊と | 東京学芸大学附属小金井中学校・3年 | 吉川 仁 |

平成29年度（第39回） 平成29年9月2日・東京都庁大会議場

| 賞 | 作品名 | 学校・学年 | 氏名 |
|-----------|-------------|--------------------|-------|
| 知事賞 | 私にできること | 東京都立桜修館中等教育学校・2年 | 柴田 葉 |
| 東京都教育委員会賞 | 気持ちを伝える大切さ | 葛飾区立本田中学校・1年 | 飯沼 凜 |
| | 国境を越えた絆を | 東京都立大泉高等学校附属中学校・1年 | 黒澤 珠月 |
| 会長賞 | 言葉のすばらしさ | 東京学芸大学附属小金井中学校・2年 | 大川 彩希 |
| | いじめを減らすためには | 立正大学付属立正中学校・3年 | 杉野 太一 |
| | 本当の優しい心 | 立川市立立川第二中学校・2年 | 常盤 奏 |
| | いつも感謝の気持ちを | 武蔵野女子学院中学校・3年 | 廣瀬 加奈 |
| | 祖父からのメッセージ | 東京学芸大学附属小金井中学校・2年 | 宮崎 秋 |
| | 努力は格好いい | 東京都立立川国際中等教育学校・1年 | 村岡 菜々 |
| | 便利さの檻 | 東京都立立川国際中等教育学校・1年 | 渡辺 結心 |

平成30年度（第40回） 平成30年9月9日・東京都庁大会議場

| 賞 | 作品名 | 学校・学年 | 氏名 |
|-----------|----------------|--------------------|-------|
| 知事賞 | 「教育」を手切り拓け | 筑波大学附属中学校・2年 | 國井結月花 |
| 東京都教育委員会賞 | これからの社会で生きるために | 台東区立忍岡中学校・3年 | 大谷 起也 |
| | 自己主張は悪いこと？ | 東京都立大泉高等学校附属中学校・2年 | 谷本 華奈 |
| 優良賞 | みえないカタチ | 立正大学付属立正中学校・3年 | 赤松 愛実 |
| | 意思よりも道を | 立正大学付属立正中学校・3年 | 坏 琴美 |
| | 個性の輝き | 國學院大學久我山中学校・3年 | 池田 倫 |
| | 増やそう、リアルな友達 | 東京都立大泉高等学校附属中学校・2年 | 岩田 佳晃 |
| | トータルコミュニケーション | 立川市立立川第二中学校・3年 | 野村 未恭 |
| | 情報が錯綜する世界 | 千代田区立九段中等教育学校・3年 | 藤田 実佑 |
| | 初めての外国の友達 | 工学院大学附属中学校・3年 | 丸山 夏未 |

登録番号 (31) 30

令和元年 12 月発行

令和元年度 中学生の主張東京都大会 発表文集

編集・発行／東京都生活文化局都民生活部地域活動推進課

〒 163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号

都庁第一本庁舎 19 階南側

電話 (03) 5388-3187

印刷／正和商事株式会社

〒 161-0032 東京都新宿区中落合一丁目 6 番 8 号

電話 (03) 3952-2154



本事業は独立行政法人国立青少年教育振興機構より委託を受けて実施しております。

